

史 跡 斎 宮 跡

昭和61年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和62年3月

明 和 町
三重県斎宮跡調査事務所

序

日本の歴史・文化の中でも極めて特異な位置を占める斎宮跡に「斎宮歴史博物館（仮称）」が建設されることが昨年決定されて以来、昭和64年度開館を目指して色々と検討が進められております。同館は、斎宮跡に一つの大きな核ができるわけであり本町といたしましては、今後進める保護・保存事業の上でも大きなステップとなるものと確信をいたしております。よって、同館に関わる受入れ事業はもとより、予想される多数の見学者への対応にも万全を図っていきたいと考えております。

また、県内外の見学者の利用と地域住民の憩いの場として昭和57年度に整備された史跡公園を、さらに2600坪程今年度に拡張整備していただきました。これによって毎年6月に開かれる「斎王まつり」のメイン会場として有効に利用され、盛大に催されるものと期待しております。

このように、斎宮跡の保護・保存・活用が進む一方、140haに及ぶ広大な史跡内に住宅密集地をもつ性格から、昭和61年度は、54件の現状変更等許可申請が提出されました。この報告書はその中で事前調査が必要であった12件の発掘調査の結果をまとめたものであります。

これらは小規模なものがほとんどでありますが、史跡内に点在しており、計画調査で得られない貴重な資料を与えてくれるものであります。これらの蓄積により斎宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後に、発掘調査にご理解・ご協力いただいた地主の方々や、発掘調査及び報告書の作成を担当していただいた三重県斎宮跡調査事務所並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和62年3月

明和町長　　辻　英輔

例　　言

1. 本書は明和町が昭和61年度国庫、及び県費の補助金の交付をうけて実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急調査の結果をまとめたものである。
2. このうち第64-1・5・9次の発掘調査は、それぞれの原因者が費用を負担した調査である。
3. 調査は明和町（斎宮跡保存対策室主管）が調査主体となり、三重県斎宮跡調査事務所が担当した。
4. 発掘調査・整理および本書の作製には、三重県斎宮跡調査事務所の横山洋平、山沢義貴、田坂仁、杉谷政樹、泉雄二があたり服部芳人、刀根やよい、坂真弓美、若林真登、松田早苗がこれに協力した。
5. 遺構実測図、遺構表示等は、全て三重県斎宮跡調査事務所刊行の調査概報に準じている。

目 次

1. 前 言.....	1
2. 第64-2次調査.....	2
3. 第64-7次調査.....	2
4. 第64-1次調査.....	8
5. 第64-3次調査.....	8
6. 第64-4次調査.....	11
7. 第64-5次調査.....	12
8. 第64-11次調査.....	14
9. 第64-6次調査.....	15
10. 第64-8次調査.....	16
11. 第64-9次調査.....	17
12. 第64-10次調査.....	17
13. 第64-12次調査.....	18

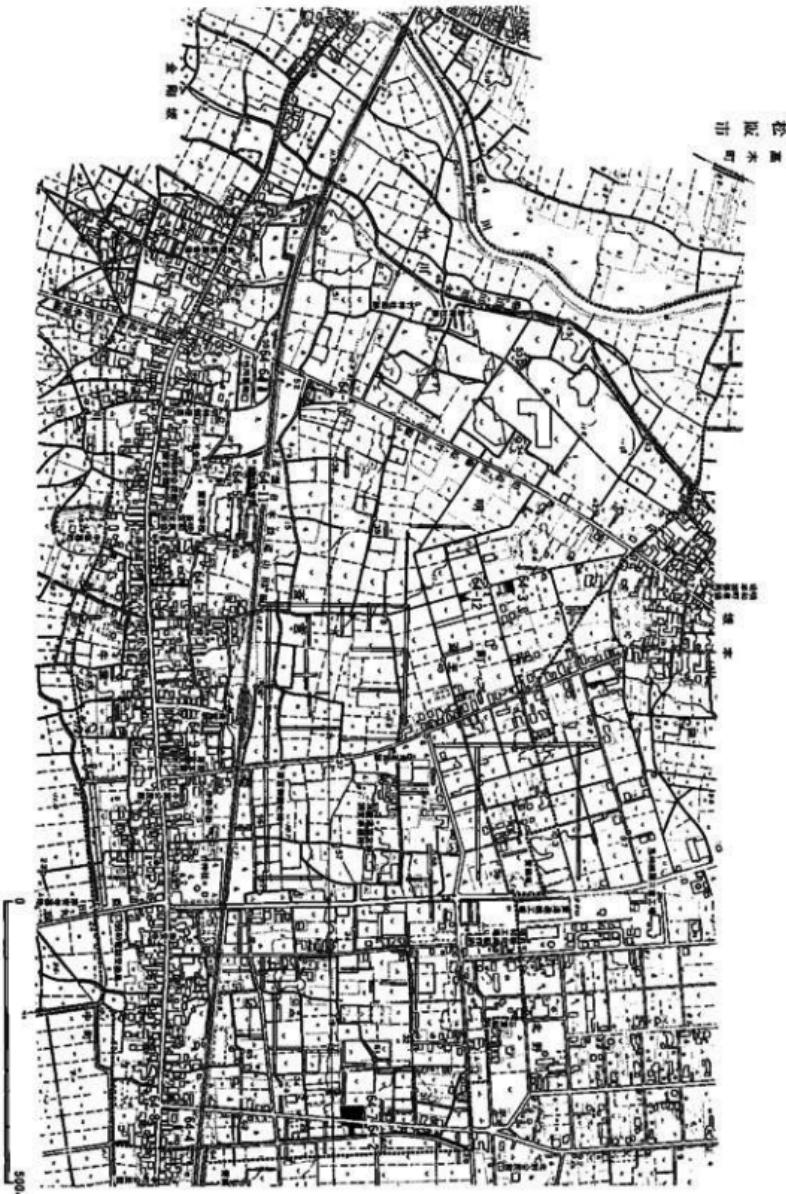


fig. 1 発掘調査個所位置図(1:10000)

1. 前 言

史跡斎宮跡の現状変更に伴う緊急発掘調査は、史跡指定後下表のように実施してきたところである。

今年度の現状変更に関する許可申請は、大小あわせて54件であったが、このうち12件について発掘調査を実施した。このなかの小規模住宅開発にともなう第64-1次調査、斎宮小学校裏庭整備に伴う第64-5次調査、町道側溝に伴う第64-9次調査の3件は原因者が調査費用を負担した。

調査を実施した面積は補助事業1507m²、原因者負担338m²になる。

調査場所は近鉄北側で5件、南側の旧参宮街道沿いで7件あり、保存管理計画でいう土地利用区分でみると、第2種保存地区2件、第3種保存地区6件、第4種保存地区4件となっている。

第2種保存地区的通称役場道を挟んで実施した第64-2次および第64-7次調査では、想定方形地割の東西溝と多くの掘立柱建物を検出した。このうち東西溝と掘立柱建物1棟が奈良時代後期までさかのばることが明らかになり、これまで検出されている同時期の遺構のひろがりがさらに確認されたことになる。一方、宮域北東部の坂本集落南の畠地で実施した第64-3次調査では、奈良時代の3間×3間の純柱建物3棟を検出した。注目されるのはこのうちの1棟の柱擺形の形態で、2つの柱擺形を細長くつないで掘り下げた後、それぞれの柱穴を更に深く掘り下げるいわゆる「溝もち」とよばれるものである。こうした擺形をもつ建物は奈良時代に限られ斎宮で3例を数えるにすぎない。このほか、調査例の少ない中町旧参宮街道沿いの第64-4次調査では全体は不明ながら深さ1mをはかる平安時代後期の東西溝を検出した。

以上のように、現状変更緊急調査は小規模な面積ながら、多くの貴重な資料を得ることができた。

年 度	現 状 変 更 申 請 数	発 掘 調 査 件 数	調 査 面 積	補 助 金 事 業 調 査 件 数	補 助 金 事 業 調 査 面 積
54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507

2. 第64-2次調査(6AGL-F)

調査場所	多気郡明和町斎宮字東加座2475-1
原因	盛土及び事務所・駐車場の新設
調査主体	明和町
調査指導	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和61年5月23日～6月13日
調査面積	200m ²

3. 第64-7次調査(6AGI-G)

調査場所	多気郡明和町斎宮字東加座2435-2
原因	テニスコート・管理棟・フェンスの新設
調査主体	明和町
調査指導	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和61年11月18日～12月17日
調査面積	820m ²

1)はじめに

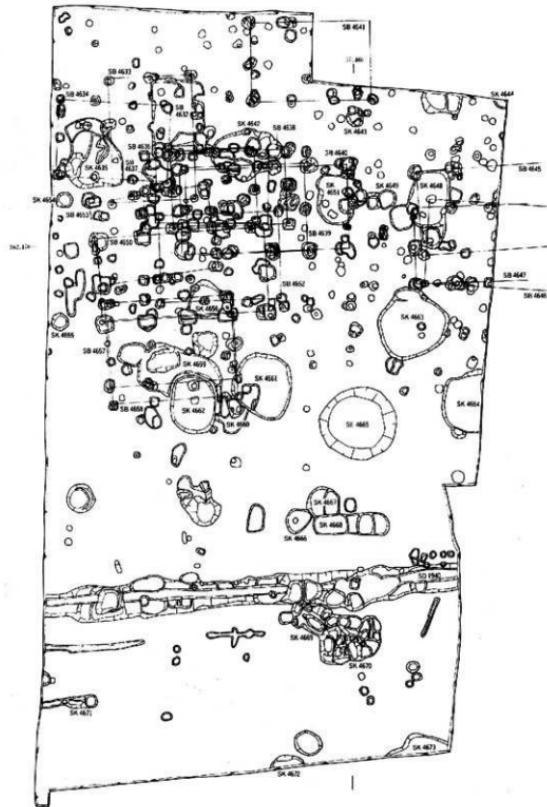
この二つの調査は史跡東端の東加座地区にあり、宮城中・東部に想定されている方形地割の北東端の区画内の南東部に位置する。通称役場道を挟んだ東側が第64-2次で約200m²、西側が第64-7次で約820m²の調査を実施した。これまでの調査から方形地割の東を限る南北方向の区画溝が第64-2次の東を流れる現在のエンマ川沿いに、さらにその東に古里地区から宮城の北を通り東を巡る大溝が、存在することが確認されている。また、第64-7次調査の西側の第35大トレンチ調査では当区画の南を限る東西方向の区画溝が検出されており、今回の調査区の南部分でもその検出が予想される地域である。

2) 第64-2次調査概要

申請地全体にわたり、近世以降のものと考えられる0.3m前後の盛土がなされており、そのため遺構面までは0.6～0.9mと予想外の深さであり、また、現況が山林のため株などが残っており、かなり調査に手間取った。

検出した主な遺構のうち、調査区南側では室町時代以降の大規模な土塙SK4630が広がっている。東西18m以上、南北9m以上、深さ0.8mで、その下で東西12m、深さ0.8mの奈良時代

64-7次



64-2次

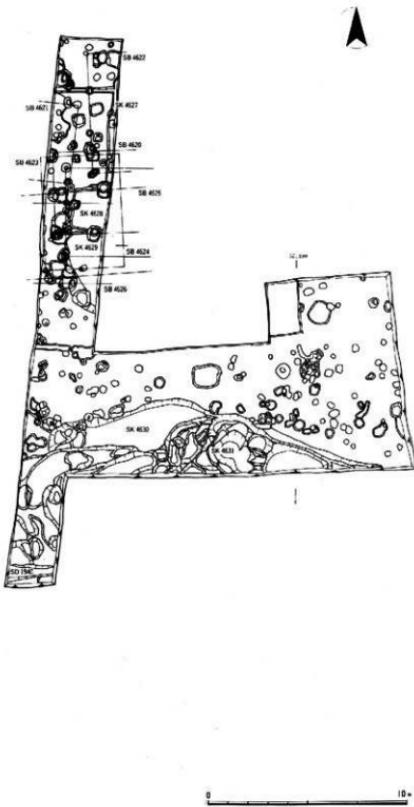


fig. 2 遺構実測図(1:200)

後期の土塙 S K 4631と、南に延ばしたトレンチ部分で奈良時代後期の東西溝 S D 1940を検出した。調査区北側のトレンチ部分では、奈良時代後期の掘立柱建物 S B 4625、平安時代初期の掘立柱建物 S B 4620、前期の掘立柱建物 S B 4623・4624・4626、中期の掘立柱建物 S B 4621、後期の掘立柱建物 S B 4622、及び鎌倉時代前半の土塙 S K 4627～4629などがあるが、建物の規模の明らかなものは少ない。

出土遺物は、調査面積に比べ比較的多く、整理箱で20箱ほど出土している。特殊なものとしては、綠釉陶器が12点、また室町時代の大規模な土塙 S K 4630から石製の硯(22)が出土している。

3) 第64-7次調査概要

第64-2次調査同様に近世以降の盛土がなされており、遺構面までの深さは北端で0.4m、南端で0.7mと南に向かって徐々に深くなっている。また、今回の調査地は排土置き場の関係から北半と南半に分けて調査を実施した。

検出した主な遺構には、奈良時代後期の竪穴住居 S B 4632、掘立柱建物としては奈良時代後期から平安時代前期のもの12棟(後述)、中期のもの2棟(S B 4634・4646)、後期のもの2棟(S B 4653・4658)と平安時代中期の土塙1基(S K 4656)、後期の土塙2基(S K 4643・4654)、平安時代中期に埋没した井戸1基(S E 4665)である。また、調査区南側で奈良時代後期の東西溝 S D 1940が検出されており、この東西溝は当区画の南を区画する溝と考えられる。

出土した遺物は整理箱で50箱あり、特殊なものとしては綠釉陶器5点、鉄製鎌1点、瓦片2点、製塙土器などがある。

以下、奈良時代後期から平安時代前期の掘立柱建物を中心に述べることにする。

奈良時代後期の遺構

竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土塙9基がある。掘立柱建物 S B 4650は調査区中央西にある4間×2間の東西棟である。柱間は2.1m等間で、柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5mの方形を呈するもので、これまで奈宮で検出されている掘立柱建物の中でも比較的大きな掘形である。棟方向は後述する東西溝 S D 1940とはほぼ同じで、東で北に4°振れる。また、第64-2次調査のS B 4625と柱筋を揃えている。

土塙はS K 4635・4642・4644・4648・4654・4659～4661・4664がある。同時期の竪穴住居、掘立柱建物の周辺を囲むように検出された。径2～4mの不整形なものが多く、遺物も比較的多く出土している。このうち掘立柱建物 S B 4650の南にはS K 4659～4661が重複して検出され、S K 4660からは土師器杯の底部外面にヘラ書きの残るもの(23)も出土している。

東西溝 S D 1940は、調査区南に位置する。西に隣接する畑で実施された第35次トレンチ調査で検出された東西溝の続きで、道路を挟んだ東の第64-2次調査でも一部検出されている。

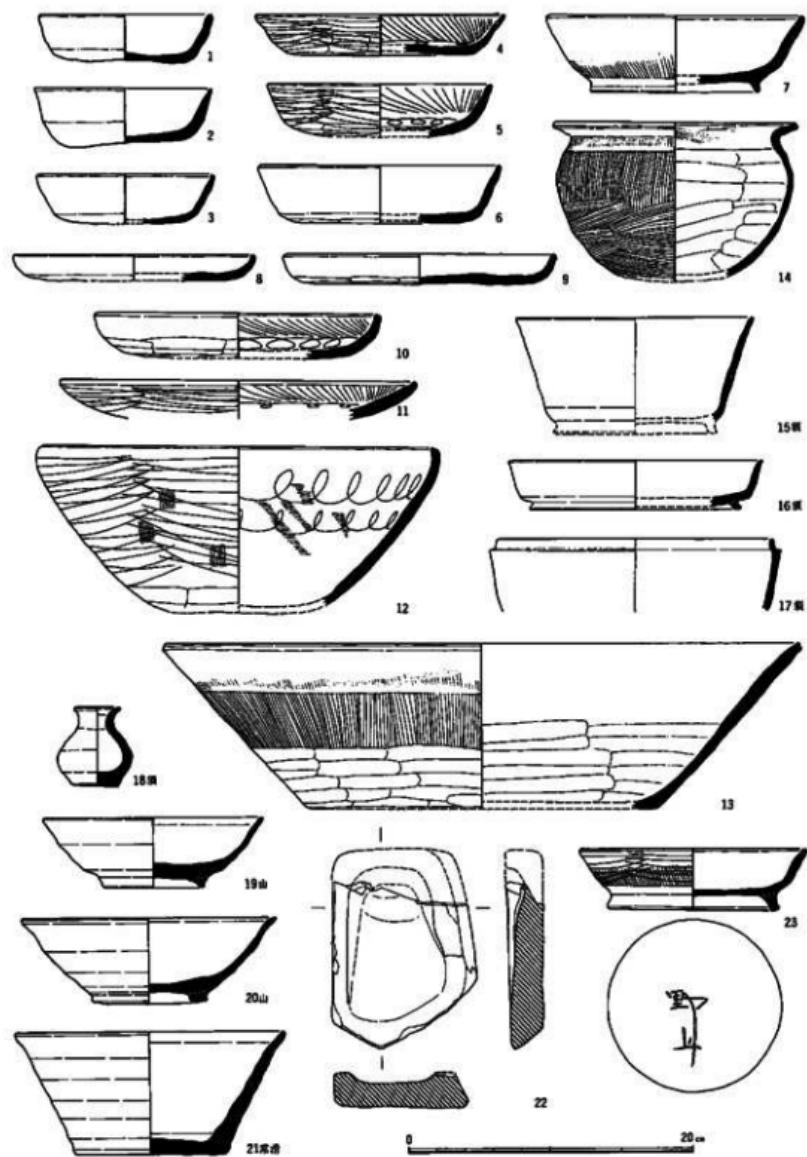


fig. 3 遺物実測図(1:4) SD 1930; 1~17、SK 4630; 18~22、SK 4660; 23

上面での幅1.2m、途中から幅0.4mとなり上面からの深さは0.5mである。出土した遺物は土師器を中心に第64-2次が整理箱で1箱、第64-7次では3箱出土しており、この遺物から平安時代初期には埋没したと考えられる。

平安時代初期の遺構

掘立柱建物S B 4640、土塙 S K 4662がある。掘立柱建物S B 4640は奈良時代後期の掘立柱建物S B 4650の東北で一部重複する位置にある。4間×2間の東西棟と、また、柱間・柱掘形の規模が奈良時代後期のS B 4650と比較的似通っていることから建て替えと考えられる。また、第64-2次調査のS B 4620と柱筋を描えている。

平安時代前期の遺構

掘立柱建物10棟、土塙11基がある。掘立柱建物は、規模の判明するものはすべて3間×2間で、南北棟が1棟あるが他は東西棟である。柱掘形は一辺0.5mの方形と奈良時代後期、平安時代初期のものと比較してやや小型である。調査区西側にあるものは、ほぼ同じ位置に重複して検出され何度も建て替えが行われたことが窺える。このうち平安時代前I期のものはSB4637・4639・4645・4647・4657で、平安時代前II期のものにはSB4636・4638がある。他のS B 4633・4641・4652は、柱掘形から出土する遺物が少なく、また、建物の切り合い関係がないため、どちらになるか不明である。

土塙は出土した遺物からS K 4649・4663・4666~4668・4671・4673は平安時代前I期、S K 4651・4669・4670・4672は平安時代前II期に分かれる。このうちS K 4663からは土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、黒色土器が整理箱で6箱出土している。

平安時代中期の遺構

史跡中・東部では当該期の遺構は少なく、当調査でも掘立柱建物S B 4634・4646のみで、ほかには当期に埋没した井戸がある。建物の方位は西で南に3°と他の時期の掘立柱建物の方位と逆のものである。

4)まとめ

第64-2・-7次調査の結果から当区画内の南東隅の状況がかなり判明した。掘立柱建物は区画溝S D 1940から10m以上離れて建てられており、これは他の区画溝周辺のものと同様の状況を示している。この掘立柱建物はほぼ同じ位置で何度も建て替えられ、第64-7次の西側の一群と東側から第64-2次にかけての一群など、建物の建てられる位置にはあまり変化がなく計画的な造営が窺える。特に西側の4間×2間の東西棟2棟や、これらと棟方向を同じくする第64-2次でのS B 4625・4620である。また、南の方形区画で実施した第69次調査では、計画的な造営は奈良時代後期に開始されたことが判明しているが、当調査でもそれを裏付ける結果となった。

4. 第64-1次調査(6 A C O - H)

調査場所 多気郡明和町斎宮字牛葉3395-1ほか
原 因 個人住宅新築
調査主体 明和町
調査指導 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和61年5月7日～5月20日
調査面積 143m²

1)はじめに

調査地は、斎宮小学校の南東に位置し、参宮街道に面する東西約12m、南北約70mの南北に細長い宅地である。調査は幅2mのトレンチを南北に入れ、そこから東西方向に3ヶ所トレンチを延ばして実施した。

2)調査概要

遺構検出面は、南で1.0m、中央で0.4m、中央から北に向かって徐々に深くなり、北端では1.5mに達する。検出された遺構は大半が現代の擾乱、井戸、便所によって破壊されていて、鎌倉時代の東西溝S D4674を検出しただけである。

5. 第64-3次調査(6 A D D - A)

調査場所 多気郡明和町斎宮字篠林3136-1
原 因 農業用倉庫新設
調査主体 明和町
調査指導 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和61年6月16日～7月4日
調査面積 140m²

1)はじめに

調査地は、宮城北部の坂本集落南部の畠地で、東西16.5m、南北8.5mの調査区を設定し、約140m²の調査を実施した。付近では第65-1次調査、東側で第25-3次調査、西方で第31-5次・第41次調査、南側で第33次調査を実施しており、いずれの調査でも奈良時代の遺構・遺物が検出されている。中でも、第31-5次と第33次調査では奈良時代の竪穴住居が計19棟、掘

64-1次

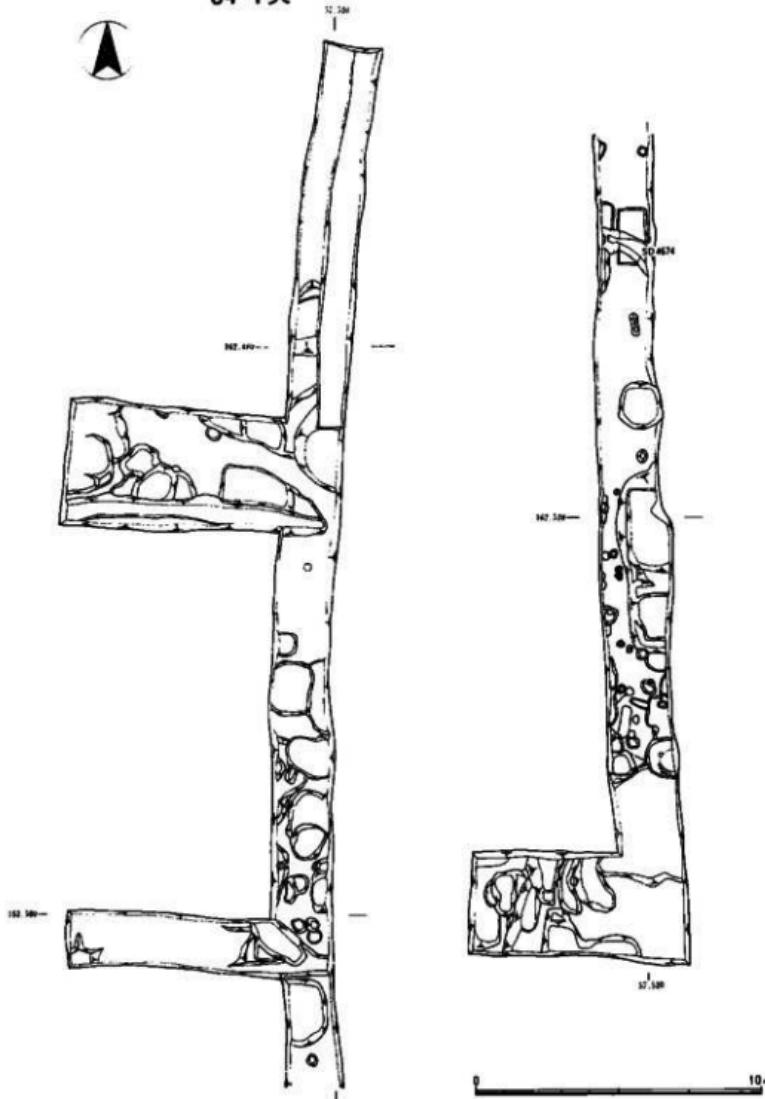


fig. 4 造構実測図(1:200)

立柱建物が5棟確認されている。

2) 調査概要

検出した主な造構としては、奈良時代の3間×3間の純柱建物3棟（S B 4675～4677）、調査区南端で北側柱列を検出したS B 4679、東西溝S D 4678である。S B 4675とS B 4676の柱間はいずれも1.25～1.3mで、S B 4679は1.4m、S B 4677のはうは東西の柱間が1.8～1.9mとやや長い。柱通りの方向はS B 4675がN4°E、S B 4676がN2°E、S B 4679がE2°S、S B 4677はE4°Sと多少の振れはあるものの大略南北軸にのる格好になっている。またS D 4678は、幅40cmの深い溝である。

注目されるのはS B 4675の柱掘形で2柱穴分を細長くいったん掘り下げた後、その中でさらに一辺60cm前後の方形の掘形を個々に掘り下げるという珍しいものである。斎宮跡では勿論初例で、古里地区の今年度の第68次調査でも同じ掘形を持つ純柱建物が検出されている。このS B 4675はS B 4676より新しいもので、S B 4677・S B 4679については断定しがたい。これら4棟は、順次奈良時代を通じてこの場所に建っていたことが想定される。

これまでの周辺の調査の結果と考え合わせると、奈良時代の建物造構としては圧倒的に竪穴住居が多いが3間×3間の純柱建物が塚山地区の第32次調査のS B 1700から第65-1次調査のS B 4318・S B 4319そして今回の調査のS B 4675～S B 4677と更に北東地域にまで分布することが明らかになった。

少なくとも現在の塚山地区から蘿林地区にかけての地域には、奈良時代の何かまとまりのある建物群があったことはほぼ確実と言えるのではないかと思われる。

64-3次

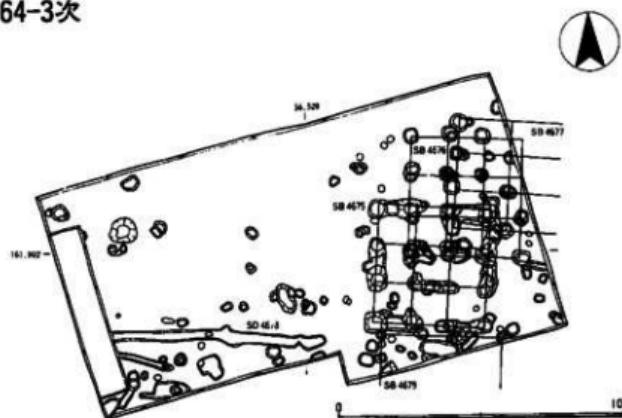


fig. 5 造構実測図 (1:200)

6. 第64-4次調査(6AGR-N)

調査場所 多気郡明和町斎宮字笛川2340
原因 個人住宅の改築
調査主体 明和町
調査指導 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和61年7月8日～7月12日
調査面積 16m²

1) はじめに

調査地は、史跡指定範囲の東南端、中町地区内の旧参宮街道北側の町並み中に位置する。これまでに周辺ではあまり調査が行われておらず、遺構の状況が不明確な場所であった。調査は、6.5m×2.5mのトレンチを設定して実施した。

2) 調査概要

遺構面までの深さは、耕土、包含層の計0.4mと比較的浅かった。検出した主な遺構には、平安時代後期の東西溝SD4680、平安時代末期の土塙2(SK4681・4682)、室町時代以降の東西溝SD4683がある。東西溝SD4680は、調査区北端で検出した東西溝で、北側が調査区外となるため幅は不明だが、深さ1m前後のしっかりしたものである。埋土からは一部平安時代前期のものも含むが、主に平安時代中期～後I期の遺物と共にミニチュアの土師器表1点が出土しており、平安時代後I期に埋没した溝と推測される。

土塙SK4681は南北1m、東西2m以上、深さ0.2m、SK4682は室町時代の東西溝SD4683と重複する位置にある南北0.7m、東西1.5m、深さ0.8mの長方形に近い。掘形の深い土塙である。

また、SD4683は調査区南端で検出した東西溝で、深さ0.2m、幅は不明。そのほか、点在する小穴は建物としてはまとまらないが、平安時代前期の土器を含むものである。

小規模な調査ではあったが、SD4680は出土遺物から、平安時代後I期に埋没した溝と推測され、北から3本目の東西方向の区画溝SD2400から約130m南に位置する場所であり、区画溝の可能性も考えられる。

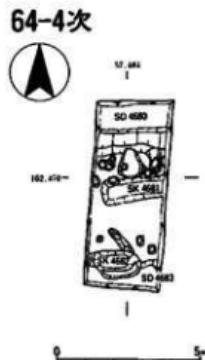


fig. 6 造構実測図(1:200)

斎宮小学校関連調査

これまで斎宮小学校では校舎・体育馆・プールの建設などによって、事前の調査（第15次調査・第48-1次調査・第48-13次調査・第53-1次調査・第53-14次調査）が実施され、奈良時代～室町時代までの遺構が検出されている。なかでも第15次調査では平安時代後期の四脚門が斎宮跡では初めて検出されている。

7. 第64-5次調査（6ACM-O）

調査場所 多気郡明和町竹川字東裏3385-2

原 因 斎宮小学校校地整備

調査主体 明和町

調査指導 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和61年7月11日～7月15日

調査面積 150m²

1) はじめに

調査地は斎宮小学校敷地の北西部に位置する。今回の調査は周辺で調査された中でも特に第48-13次調査の遺構とのつながりに重点をおき、第48-13次調査地の北側に幅2.5m、長さ60mのトレンチを設定し、調査を実施した。なお、遺構面まで深いことが判明しているため重機を使用して調査に入った。

2) 調査概要

周辺の調査から予想されたように遺構面までは深く、西で地表面から約1m、東で0.5mである。検出した主な遺構には、奈良時代の竪穴住居S B 4688、土塙S K 4687、斜行溝S D 3802、L字状に折れ曲がる溝S D 4684・4685、平安時代末期の南北溝4(S D 3382・3386・3389・4690)、斜行溝S D 4686がある。掘立柱建物については、トレンチの幅が狭いためまとまるものは確認できなかった。

竪穴住居S B 4688は調査区外に広がるため規模は不明。深さは0.17mで方形を呈するものと考えられる。出土した遺物は少ない。土塙S K 4687は深さ0.2mの不整形土塙で、奈良時代の遺物を少量出土している。

斜行溝S D 3802は幅1.0m、深さ0.3mの規模で、第53-14次調査で検出した斜行溝に続く溝と考えられ、埋土から奈良時代中期の土師器表を多量に出土した。またL字状に曲がる溝

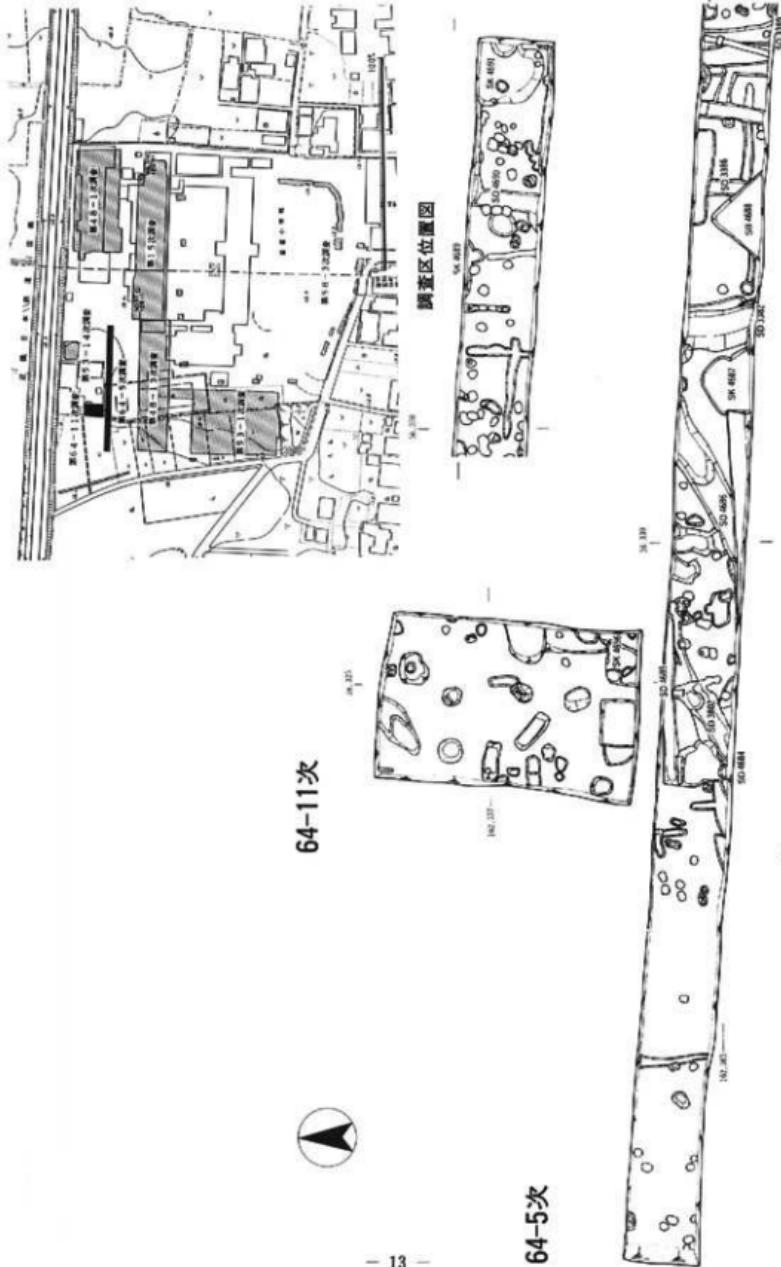


fig. 7 调查测图(1:200)

S D 4684・4685はS D 3802より新しい。出土した遺物から奈良時代中期の遺構と考えられるが、南の第48-13次調査、東の第15次調査では検出されていない。

南北溝S D 3382・3386・3389は、南にある第48-13次調査で検出されている溝の続きで、調査区東側で新たに南北溝S D 4690を検出した。S D 3382は幅1.5m、深さ0.5mと比較的規模が大きなものであるが、そのほかのものは、幅0.5m程度、深さ0.1~0.15mと比較的浅い溝である。

そのほか調査区東部で検出された土壙S K 4689・4691は遺物がほとんど出土せず時期をきめることはできなかったが、S K 4689から綠釉陶器が1点出土している。

8. 第64-11次調査(6 ACM-O)

調査場所	多気郡明和町竹川字東裏3385-2
原 因	斎宮小学校飼育舎、観察池の設置
調査主体	明和町
調査指導	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和62年2月23日~2月28日
調査面積	54m ²

1) はじめに

調査地は斎宮小学校敷地の北西部に位置し、斎宮小学校が整備拡張するまでは個人住宅が建てられていた地域である。昨年夏に第64-5次調査(東西トレンチ)が実施されており、今回の調査地は、その東西トレンチの中央部やや西よりで、北接する位置に6m×9mの調査区を設定した。これまでの調査の結果から遺構検出面まで深いことが判明しているため、第64-5次調査同様重機を使用して調査を実施した。

2) 調査概要

遺構面までは深く、上より校地整備に伴う盛土0.2m、個人住宅及び学校に伴う盛土0.9m、旧耕土・床土0.3mの計1.4mに達した。

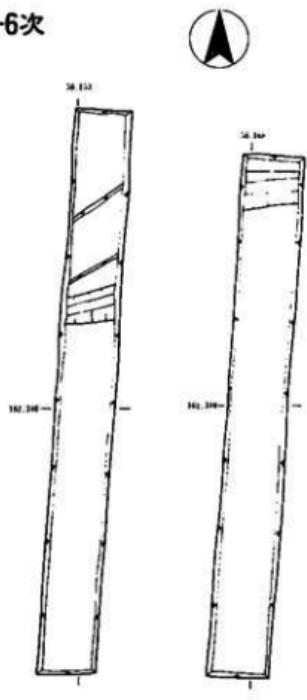
近現代の搅乱が及んでおり、検出した遺構は、奈良時代の土壙S K 4696を調査区南東隅で検出しただけである。規模は調査区外に延びるため不明である。深さ0.2m。奈良時代の土師器を少量出土した。また、この土壙に伴う遺物以外はほとんど出土しなかった。

斎宮小学校内でも当地域についていえば遺構の密度の薄い地域であったと考えられる。

9. 第64-6次調査 (6ACK-)

調査場所 多気郡明和町竹川字東裏361-2
 原因 自治会広場の新設
 調査主体 明和町
 調査指導 三重県考古官跡調査事務所
 調査期間 昭和61年10月20日～10月22日
 調査面積 76m²

64-6次



64-8次

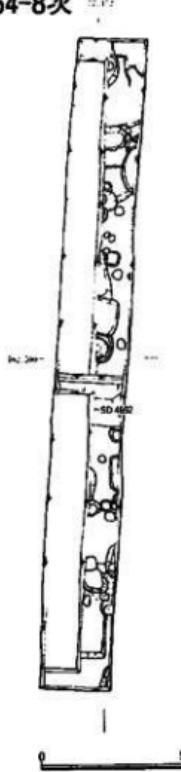


fig. 8 造構実測図(1:200)

1)はじめに

調査地は竹川墓地と近鉄線の間に位置する。現況は山林で北に向かってなだらかに傾斜し、北と南との比高差は約0.6mである。南を走る東西道路の調査(第16-1次調査)、東側の近鉄の防護柵建設に伴う調査(第58-8次調査)の結果から当調査地は、かなり土取りによって削平されていることが窺えるため、幅2m、長さ20m前後のトレンチを2本南北にいれ、調査を実施した。

2)調査概要

遺構面までの深さは、南で地表より約1m、北で0.2~0.4mである。当初の予想通り土取りによって大半の遺構が壊されており、検出された遺構は攪乱や近現代の溝だけである。出土した遺物は、灰釉陶器が数点出土したのみである。

10. 第64-8次調査(6AGR-J)

調査場所 多気郡明和町斎宮字笛川2341-6ほか

原因 個人住宅の増改築

調査主体 明和町

調査指導 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和61年11月26日~12月1日

調査面積 57m²

1)はじめに

調査地は、史跡指定範囲の東南端、中町地区の旧参宮街道北側の町並み中である。南北23m、東西2.5mのトレンチを設定し調査を実施した。旧参宮街道沿いという地理的条件により、調査区全体にわたり近世以降の整地が行われており、遺構も近世~近代の土師器・陶器を含む土塙と井戸が大半である。

2)調査概要

検出した主な遺構には、調査区中央の室町時代のS D 4692がある。幅1.6mの断面V字形を呈する、深い東西溝で、何らかの区画のための溝であるかも知れない。

出土遺物は、遺構の状況に対応して、近世~近代のものがほとんどであるが、わずかながらも平安時代の土師器がみられることは、明らかに平安時代の遺構の存在を示唆するものであり、今後の周辺の調査に期待される。

11. 第64-9次調査 (6 A D Q - M)

調査場所 多気郡明和町斎宮字牛葉地内

原因 町道側溝新設

調査主体 明和町

調査指導 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和62年1月26日～1月29日

調査面積 45m²

1)はじめに

調査地は、近鉄斎宮駅と旧参宮街道とを結ぶ町道の斎宮駅側である。南北45m、幅0.7mの調査区を設定し調査を実施した。南側の参宮街道までの30mは、昨年度第58-5次調査が実施され、遺構面までの深さは北で0.8m、南で1mに達することが判明している。

2)調査概要

遺構面までの深さは、南で0.6m、北で0.7mである。検出した遺構は、調査区南側で土塁2基(SK4693・4694)を検出した。ともに南北2～3m、深さ0.6～0.8mで遺物は出土していないが、西側の駐車場の調査(第12-4次)でもこの土塁の近辺に室町時代の大土塁があることから、同時期のものと考えられる。

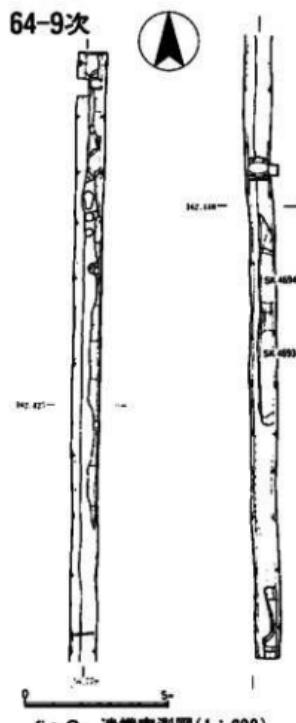


fig. 9 遺構実測図(1:200)

12. 第64-10次調査 (6 A C F - A)

調査場所 多気郡明和町竹川字東裏365-1

原因 農業用倉庫新設

調査主体 明和町

調査指導 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和62年2月16日～2月17日

調査面積 40m²

1) はじめに

調査地は、東裏地区の県道南蘿原・竹川線の東に位置する。4m×10mの東西トレンチを設定して調査を実施した。

2) 調査概要

検出した遺構には、掘立柱建物S B4695がある。掘立柱建物S B4695の規模は東西が2間、南北は調査面積が狭く不明である。柱間は1.9~2.1mで、方向はN4°E。柱穴内より土師器甕の小片1片しか出土しておらず建物の時期は断定できないが、周辺の調査から考えておそらく奈良時代のものと考えられる。

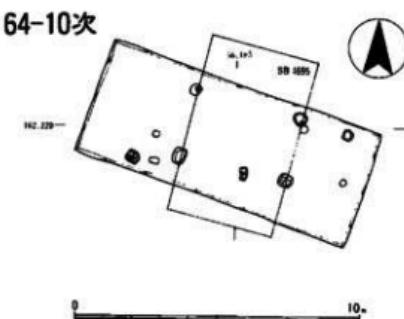


fig. 10 遺構実測図(1:200)

13. 第64-12次調査 (6 A D E - B)

調査場所 多気郡明和町斎宮字篠林3162-3

原 因 個人住宅の新築

調査主体 明和町

調査指導 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和62年3月9日~3月28日

調査面積 104m²

1) はじめに

調査地は、宮城中央の篠林地区と西部の塙山地区とを分ける字界にあたる南北道に面している。宮城中央部の西北にあたる篠林地区では、今回の調査地に東接して第33次の計画調査が実施されており、奈良時代と平安時代後半~末期を中心とする遺構が検出されている。また、今年度の第64-3次調査も北側で実施され、奈良時代の掘立柱建物が4棟検出されている。

2) 調査概要

遺構面までの深さは耕土、床土、包含層が各0.2mの計約0.7mである。検出した主な遺構には、奈良時代の竪穴住居S B4697~4699、掘立柱建物S B4700・4701、土坑S K4705がある。平安時代のものは前期、中期の遺構ではなく、第33次調査で検出した末期の溝S X1819や土坑

S K 4702～4704を検出しただけである。

S B 4697～S B 4699はいずれも調査区西端で一部検出したため、規模は不明である。このうち、S B 4698・S B 4699は当初は同一の住居と考えていたが、南隅で焼土を伴う甕が出土し、この甕がカマドの支柱であり、同一住居と考えるとカマドの位置が南すぎること、また、北側部分の床がかたく踏み締められているのに対し、南側にはそれが認められないことから、ここでは2棟の竪穴住居が切り合っていると考えた。

掘立柱建物S B 4700・4701は調査区西端で検出したもので、建物の方位はN-Sを示している。このうちS B 4701は南北3間分検出しており、3間×2間の南北棟と考えられる。竪穴住居と掘立柱建物の柱掘形から出土した遺物は少ないが、いずれも奈良時代前期の遺構である。

また、土塗S K 4705はほぼ同時期のものが重複するもので、東西6m、南北7m、深さ0.6mの比較的規模の大きなものである。出土した遺物は奈良時代前期の土師器を中心に整理箱で6箱出土している。

特殊な遺物としては、綠釉陶器1点、円面硯1点が出土している。

今回検出された遺構も含めて当地域周辺では奈良時代の掘立柱建物が数多く検出されていて、奈良時代の斎宮を考える上で非常に重要な地域であることがより明らかとなった。

64-12次

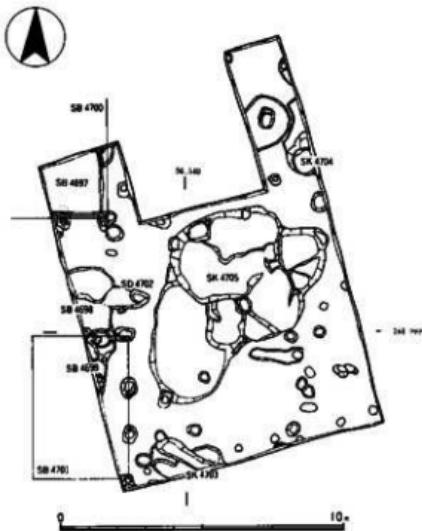


fig. 11 遺構実測図(1:200)

図 版



第64-1次調査（南から）



第64-2次調査（西から）

PL 2



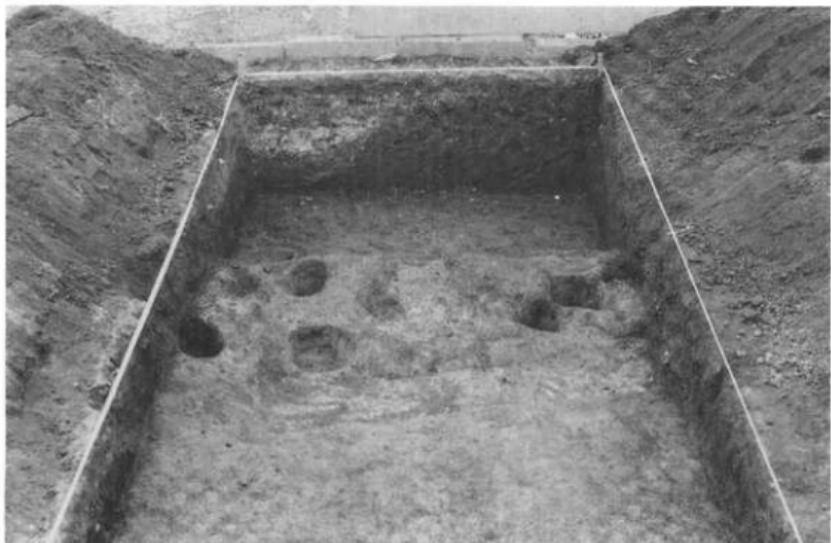
第64-2次調査（南から）



第64-3次調査（北から）



第64-3次調査（西から）



第64-4次調査（南から）

PL 4



第64-5次調査（東から）



第64-7次調査（西から）

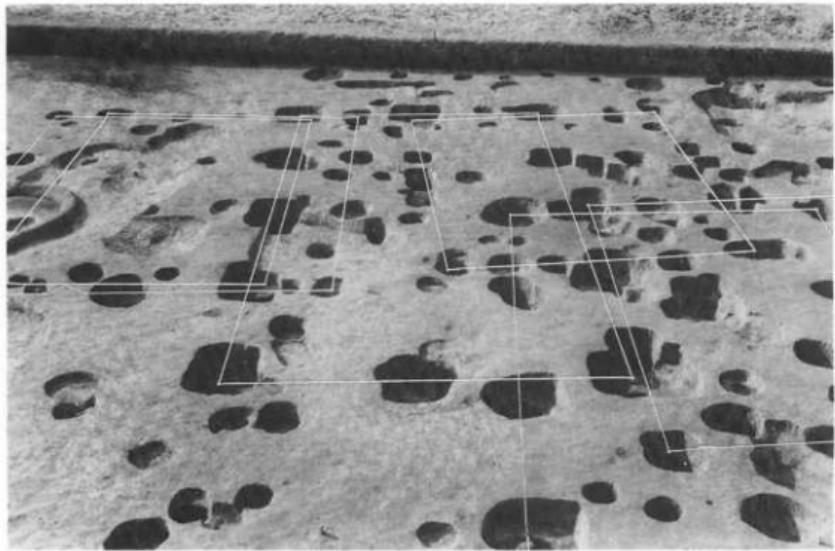


第64-6次調査（南から）



第64-7次調査 北部（西から）

PL 6



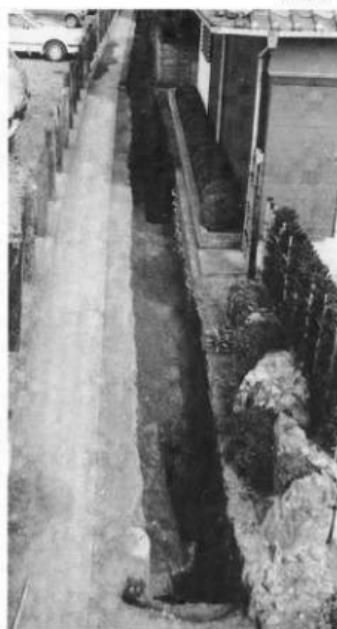
第64-7次調査 SB4650 (東から)



第64-7次調査 SB4650 (北から)



第64-8次調査（北から）



第64-9次調査（南から）



第64-10次調査（東から）

PL 8



第64-11次調査（北から）



第64-12次調査（北から）

史跡斎宮跡
昭和61年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和 62 年 3 月 31 日

編集 三重県斎宮跡調査事務所
明 和 町
発行 明 和 町
印刷 光出版印刷株式会社

本書は、明和町及び三重県斎宮跡調査事務所の許可を得て、斎宮研究会(代表 錦部貞藏)が増刷したものである。

